

『芋粥』（芥川龍之介）小考

吉田俊彦

はじめに

《僕は来月の新小説へ芋粥と云ふ小説を書く 世評の悪いのは今から期待してゐる 偷盗と云ふ長編をかきかけたが間にあひさうもないのでやめた 書きたい事が沢山ある 材料に窮すると云ふ事はうそだと思ふ どんどん書かなければ材料だつて出てきはしない 持つてゐる中に醗酵期を通り越すと腐つてしまふ 又書いて材料に窮するやうな作家なら創作をしてもしかたがない》

これは、大正五年七月二十五日、親友・恒藤恭に書き送られた書簡の一節である。「書きたい事が沢山ある」「書いて窮するやうな作家なら創作をしてもしかたがない」と記す筆勢には、旺盛な創作意欲と強大な自信を抱く芥川の、高揚した精神の奔出が感じられる。芥川は、こうした意欲と自信を抱きながら、何故、『偷盗』を中断しなければならなかったのか。この『偷盗』中断の根本的原因是、『芋粥』の完結性を支える基本モチーフと、表裏の関係で密接に関っているのではなからうか。

『鼻』を発表した「新思潮」（第四次創刊号、大正5・2）の編集後記で、芥川は、「僕はこれから今月と同じやうな材料を使つて創作するつもりである。あれを単なる歴史小説の仲間入をさせられてはたまらない」（傍点引用者）と述べているが、『澄江堂雑誌』の中の、日本の歴史小説は「大抵古人の心に、今人の心と共通する、云はばヒュマンな閃きを捉へた、手つ取り早い作品ばかりである」が、「現代のそれとは大分違ふ」考え方を「虚心平氣に書き上げ」て、「現代との対照の間に」「或暗示を与へ」るやうな「新機軸を出すものはないか」（九

「歴史小説」とか、あるいは「テエマを芸術的に最も力強く表現する為に」「異常な事件が必要になると」「不自然の障礙を避ける為に舞台を昔に求めた」（三十一「音」という作品形象論を対応させてみる時、『芋粥』『偷盗』の芥川が、『羅生門』と同じように、古い昔の異常な非人間的の世界の中に、不可思議な人間存在の真実を暗示しようとしていたことは間違いない。この形象論とともに重要なことは、『芋粥』『偷盗』に働く主要モチーフが何かということである。

海老井英次氏の指摘に見られるように、「There is something in the darkness says the elder brother in the Gate of Rasho.」と云う創作メモなどから推して、「『偷盗』の主題そのものが『羅生門』を前提としなくては成立しなかった」ものであり、「『羅生門』をとりまへ『darkness』の中に『something』を見出」そうとすることは、『偷盗』の主要なモチーフといえよう。問題は、「古人の心に、今人の心と共通する、云はばヒュマンな閃きを捉へ」るやうな「手つ取り早い作品」に仕上げることを禁じる『偷盗』の芥川が、『羅生門』をとりまへ「darkness」の中で、どういふ難渋な障害に直面し、そして、『芋粥』の形象内容が、その障害とどういふ関連を持っているかということである。

この小論では、まず第一に、『羅生門』の「darkness」から脱却していく芥川の新たな認識方向を探り、次いで、『芋粥』の登場人物、五位と利仁の人物的特徴に働く主要モチーフに着目し、最後に、『偷盗』の中断に見合う『芋粥』の認識帰結と作品史的位置について尋ねてみたい。

一 「something」の認識方向

芥川が、不幸な生の体験を「darkness」として、心底深く認識しなければならなかったのは、吉田弥生との恋愛の破綻に直面した時である。この時の苦悩の様子は、親友・恒藤恭宛の書簡内容によって推測することができるが、その苦悩を超脱していく新たな生の方向は、大正四年二月二十八日付と大正四年三月九日付の二通の書簡を対置してみる時、明瞭になってくる。

弥生との結婚に対する猛反対を家族の者から受けた芥川は、「夜通し泣」（大正4・2・28）いた後、結局は自分の思いを抑え、「僕が思切る」（同）と諦めるのであるが、この苦悩の直前から読みはじめていたトルストイの『イワン・イリッ

チの死』の影響は、大きな意味を持つものと考えらる。

《よみかけたイワン・イリツチもよまなかつた。それは丁度ロランに導かれてトルストイの大なる水平線が僕の前にひらけつゝある時であつた。大へんさびしかった。(略)すべてが流れてゆく。そしてすべてが止るべき所に止る。学校へも通ひはじめた。イワン・イリツチもよみはじめた。》(大正4・2・28、恒藤恭宛書簡、傍点引用者)

芥川の前に開けつゝあつた「イルストイの大いなる水平線」については、大正五年八月一日に認められた山本喜喜司宛の書簡内容によつて、より具体的に捉えなおすことができる。

《この頃ロマン・ロランのトルストイをよんで非常に感激した一寸のすきもなく自分の弱点を攻めて行つたトルストイの事を考へると便々とくらしてゐるのが勿体ないやうな気さへする。トルストイはたへず自分を襲ふ悪徳として賭博癖・色欲・虚栄心の三つをあげてゐるが、その三つを教つた時に彼は現にその各々に耽溺してゐたのである。すべての悪が彼の手では善に生かされる。(略)僕は此頃しみじみトルストイの大いさを思ふ。／「たゞ苦まなければならぬ。すべてをすてゝ苦まなければならぬ。通り一ぺんの苦痛は苦痛と感ぜぬ程に苦まなければならぬ。それが神の意志だ。此意志に従つてはじめて人間は出来る。》(傍点引用者)

自己の弱点を徹底的に攻めて行き、そして、重い責苦のもとで、すべての悪を善に変容していかうとする生き方は、生半可な覚悟では実行しがたい難事である。しかし、不幸な愛の体験を通し、自他の醜惡な我執に直面しなければならなかつた芥川は、『イワン・イリツチの死』とロマン・ロランの『トルストイ論』を讀破することによつて、トルストイの偉大な精神を魂の深部に受けとめることができたのではなからうか。大正四年三月九日付の恒藤恭宛の書簡には、トルストイの強い影響が顕著に表れてゐるといふよう。

《イゴイズムをはなれた愛があるかどうか。(略)イゴイズムのない愛がないとすれば人の一生程苦しいものはない。／周囲は醜い。自分も醜い。そしてそれを目のあたりに見て生きるのは苦しい。しかも人はそのまゝ生きる事を強ひられる。一切を神の仕業とすれば神の仕業は悪むべき嘲弄だ。／(略)／僕に

はこのまゝ回避せずにすすむべく強ひるものがある。そのものは僕に周囲と自己とのすべての醜惡を見よと命ずる。僕は勿論亡びる事を恐れる。しかも僕は亡びると云ふ予感もちながら此ものの声に耳をかたむけずにはゐられない。(略)馬鹿馬鹿しい程センチメンタルになる事もある。どこかへ旅行でもしやうかと思ふ。何だか皆とあへなくさうな氣もする。大へんさびしい。》

右書簡内容で留意すべき事項は、^{注(3)}三点に整理することができる。第一点は、エゴイズムと生存苦についての認識である。これは、『イワン・イリツチの死』の前半部に働く人間乃至は生の認識と重なり合うものである。イワン・イリツチは「才能に富」(二)み、しかも、「快活で人がよく」「社交的な人間」(同)であつたが、常に立身出世を計算する「傾向」(同)を持つ男である。妻には「便宜」(同)と世間通用の「上品な外部形式」(同)のみを要求している。一方、彼の妻は、妊娠後から「嫉妬し」「機嫌とりを要求し」(同)何かにつけてはしたなく、出産後は「いよいよ口やかましく、怒りっぱ」(同)くなつていく女である。結婚当初の「琴瑟相和」(三)の生活を蘇らせるのは、「同僚よりも二級も上の役」(同)とか「立派な住居」(同)を手にし得た時である。この我執と欺瞞に蔽われた二人の生活が喚び起すものは、「イゴイズムをはなれた愛があるかどうか」という疑念であり、これがそのまま、芥川自身の生活問題を整理していく重要な人間認識として定着したのではなからうか。

第二点は、醜惡な人間存在と生存苦の自覚のもとで、「一切を神の仕業とすれば神の仕業は悪むべき嘲弄だ」という神への憤懣を吐露する発想形式である。この形式は、芥川の生い立った下町の精神風土に根を下ろすものとは言いがたいが、これは、医師の診断や妻の配慮に虚偽の覆面を見、疑惑と憤懣と恐怖と孤独の苦艱に陥りながら、「子供のようになをあげて泣き」(九)「自分の頼りなさを思い、自分の恐ろしい孤独を思い、人間の残酷さを思い、神の残酷さを思い、神の存在しないことを思」(同)イワン・イリツチの思いに重なり合うものである。

第三点は、「周囲と自己とのすべての醜惡」を凝視しようとする決意を固めながら、同時に、「馬鹿馬鹿しい程センチメンタルにな」り、当てのない旅への思いに傾斜していく衝迫である。自他の醜惡を凝視しようとする決意は、深い懊悩の底で、「魂の声」(九)に耳を傾けながら、「大がかりな欺瞞」(同)に蔽われた

自他の生活を凝視するイワン・イリツチの姿勢に照応するものである。問題は、イワン・イリツチの影響下に、自他の醜さを凝視しようとする決意を固めながら、日常性を超脱した「旅」の中で、命の再生を図ろうとする思いが自ずと生れ出ていることである。この人間凝視と日常性の超脱という対蹠的な衝動を抱く芥川は、トルストイの受容過程において、様々な分裂的状况を喚び起し、東西文化の異質性の問題に逢着しなければならなかったものと考えられるが、『イワン・イリツチの死』の世界の中で自己の不幸な生活体験を整理し、苦悩超脱のための抛り所をそこに探り当てようとした芥川にとって、ゲラシムとワシーシャの無垢な魂は、新たな展望を開くための重要な力になっていたのではなからうか。ここで、『偷盗』の悪役・猪熊の爺の最期の場面に注目してみたい。

《彼は、沙金の古い桂を敷いた上に、仰向けに横はつて、半ば眼をつぶりながら、時々ものに怯えるやうに、しはがれた声でうめいてゐる。》時の間、此処にかうしてゐるのか、それとも一年も前から同じやうに寐てゐるのか、彼の困憊した心には、それさへ時々はわからない。眼の前には、さまざまな幻が瀕死の彼を嘲るやうに、ひつきりなく往来すると、その幻と、現在門の下で起つてゐる出来事とが、彼にとつては、何時か全く同一な世界になつてしまふ。彼は、時と処とを別たない昏迷の底に、その醜い一生を、正確に、しかも理性を超越した或順序で、まざまざと再、生活した。／「やい、お婆、お婆はどうした。お婆。」／彼は、暗から生まれて、暗へ消えてゆく恐ろしい幻に脅やかされて、身を悶へながら、かう呻つた。》（偷盗八）

これに対応するイワン・イリツチの内面描写は、次のとおりである。

《「うっ！ うっ！ うっ！ うっ！ うっ！ うっ！」彼はさまざまな音調でわめいた。》（略）／その三日の間、彼にとっては時間というものが存在しなかった。彼はその間ひっきりなしに、打ち勝つことのできない、目に見えぬ力により押し込まれた、黒い袋の中でもがき続けた。《略》突然ある力が彼の胸や腹をついて、ひときわ強く呼吸を圧迫した。と、彼は深い穴の中へ落ち込んだ。すると、その穴の端のほうになにやら光りだした。彼は汽車に乗っている時に似た気持を経験した。前のほうに進んでる気である、今度は後ろへ向けて走っているように思われる。そのうちにとつぜん本当の方向がわかつてくるのである。「そうだ、なに

もかも間違っていた」と、彼はひとりごちた。》（イワン・イリツチの死一二）

傍線部（一）における猪熊の爺の「しはがれた声」は、肉体の苦痛と死の恐怖に呻吟する声であり、これは、イワン・イリツチの「さまざまな音調でわめく」声に対応するものである。次いで、傍線部（二）においては、喪失した時間感覚の対応が捉えられるのであり、芥川は、トルストイの抽象的な筆法をより具体的に置き換えたに過ぎない。傍線部（三）においては、「さまざまな幻」という得体の知れない力によって陥る意識の混濁と「打ち勝つことのできない、目に見えぬ力」によって陥る認識の混濁との対応が見られる。トルストイの描くものは、『死刑囚が首斬人の手の中』（イワン・イリツチの死十二）で味わうように、明瞭な能動的意識でもって戦き苦しまなければならない死の恐怖であり、しかも、「自分の生活が立派なものだったという意識」（同）を捨てきれないままに、死の宿運に閉ざされた「黒い袋の中」で呻吟する混迷の姿である。これに対し、芥川の描くものは、幻覚による意識の混濁であり、能動的な知覚意識による生の認識志向は働いてはいない。傍線部（四）においては、トルストイが死の宿運に身を任せた清浄な魂によって、新たな生の次元を開きはじめているのに対し、芥川は、意識の混濁に身を任せた無意識の純粹さによって、あるがままの生の認識しはじめているのである。傍線部（五）における相違は、この新たな生の次元の眺望とあるがままの生の認識との径庭によって生じたものであり、芥川の救済への道程は、トルストイに比べ、遙に遠いものといえよう。傍線部（六）において、イワン・イリツチが「そうだ、なんにもかも間違っていた」という懺悔とともに魂の平安を獲得するのに対し、猪熊の爺が恐ろしい幻に脅されて、身を悶えながら「呻」るという大きな相違を見せるのは、当然の帰結である。しかし、芥川は、やがてトルストイの炯眼を助けに、猪熊の爺に救済の道を開くのである。

《松明の火を前に立つた、平六のまはりを開んで、十五六人の盗人は、立つものは立ち、臥すものは臥して、いづれも皆、首をのびしながら、別人のやうに、やさしい微笑を含んで、この命が宿つたばかりの、赤い、醜い肉の塊を見守つた。赤ん坊は、しばらくも、ちつとしてゐない。》（略）／《略》突然、猪熊の爺が、どこにそれ丈の力が残つてゐたかと思ふやうな声で、陰しく一同の後から、声をかけた。／「その子を見せてくれ。よ。その子を見せないか。やい、

極道。〕／（略）／猪熊の爺は、濁った眼を大きく見開いて、平六が身をかゝめながら、無造作につきつけた赤ん坊を、食ひつきさうな容子をして、ちつと見た。見てゐる中に、顔の色が、次第に蠟の如く青ざめて、皺だらけの眦に、涙が玉になりながら、たまつて来る。と思ふと、ふるふる唇のほとりには、不思議な微笑の波が漂つて、今迄にない無邪気な表情が、何時か顔中の筋肉を柔らげた。しかも、饒舌な彼が、そうなたた儘、口をきかない。一同は、「死」が遂に、この老人を捕へたのを知つた。しかし彼の微笑の意味は誰も知つてゐるものがない。』（偷盗八、傍点引用者）

「命が宿つたばかりの、赤い、醜い肉塊」は阿濃の産んだ子供である。「腹の兒の親さへ知らない、阿呆な」(七) 阿濃に意地悪い擲掄を重ねていた盗賊連中が、阿濃の胎内から出産したばかりの小さな命を前に、「別人のやうに、やさしい微笑」を浮べるところには重い意味があるのであり、これは、「赤ん坊を、食ひつきさうな容子をして、ちつと見」つめながら、猪熊の爺が浮べる「涙」や「不思議な微笑」とともに、芥川の探り当てた、「darkness」超脱のための重要な「something」の一つであつたといえるのではなからうか。阿濃の「白痴に近い天性」(七)は、「恐ろしい野性と異常な美しさ」が一つになつた「女のなまめかしさ」(四)を武器とする沙金の凄艶な魔性とその魔性に憑かれて呻吟する太郎や次郎や猪熊の爺などの醜悪な確執を鮮明に映し出しているが、これは、『イワン・イリツチの死』の世界の醜い暗部を照らし出す農夫・ゲラーシムの純朴な魂に重なり合うものといえよう。そして、猪熊の爺に「不思議な微笑」を齎す阿濃の「赤ん坊」の小さな命は、イワン・イリツチが、地獄の苦難の中で、「一点の光明」(十二)とともに受け入れられるワーシヤの無垢な魂に通じるものである。このようにして、トルストイの大きな影響のもとに『偷盗』を描く芥川は、彼自身の心底に根を張る日本固有の「家族我」^{注5}と脆弱な自我意識の問題に遭遇し、思ひぬ混迷に陥つたのではなからうか。『芋粥』の五位の形象は、この問題と密接な関りを持つものと考えられる。ここで、『芋粥』の形象内容に注目してみたい。

二 五位と利仁との人間関係

『芋粥』の五位の形象過程において、次の三点は、原話を越えた芥川の独創性として捉えることができる。

その第一は、「年来に成て所得たる」(今昔物語、巻二十六「利仁將軍若時從京敦賀將行五位物語」第十七)という形容が削除され、世間の輕侮に翻弄される卑小な人物としての特性が強調化されていることである。つまり、応報譚モチーフが消滅しているのであるが、これは、『羅生門』の主人公・下人の変転極まりない心理形象を通し、社会的な規範とか日常的な合理性を超えた人間の、無気味な生命体を見定めてきた芥川にとって、必然の結果であつたといわなければならない。

第二は、徹底的な卑小化によって、世間の惡意に翻弄される五位の生活様相が、摂政家の侍所という公的な機関の身分関係の中で、具体的に捉えられていることである。上役、同僚、下役の総ての人物から輕視され、愚弄される五位の姿は悲惨という外はない。五位の「出入りには、不思議な位、冷淡を極め」「五位が何か云ひつけても、決して彼等同志の雜談をやめた事はない」下役、「何を云ふのも、手真似だけで用を足し」「用を弁じない事が、時々ある」と、「五位の悟性に欠陥があるからだ」として五位を侮蔑する上役、そして、「進んで」五位を「翻弄しよう」とする同僚、こうした周囲の苛酷な仕打ちに打ちのめされる五位には、自己の存在証明を対人関係の中で果すことは不可能である。芥川は、こうした五位の悲惨な生活の根本原因を、摂政家の公的機関乃至はそれを取り巻く社会的な構造悪の問題として追求していこうとはしていない。五位の悲劇は、どこまでも、貧相な風貌と意気地ない性格を持った弱小人間の閉塞的な内心劇として終っていくのである。

第三は、「丹波の国」の出身である無位の若侍と京童を登場させていることである。とりわけ、無位の若侍の設定意味は大きい。彼は、「始めは皆と一しよに何の理由もなく、赤鼻の五位を輕蔑し」ていたが、「笑ふのか、泣くのか、わかないやうな笑顔をして」「いけぬのう、お身たちは」という声を聞いてからは、「五位が全く別人として、映るやうにな」り、そして、「五位の事を考へる度に、世の中のすべてが急に本来の下等さを露すやうに思はれ」だすのである。

三好行雄氏は、主題提示に関する重要な人物として、この無位の若侍に着目されている。『羅生門』の下人が、「老婆を負け犬に追うこと」で「負け犬」から「勝ち犬」に転じたその「一瞬の明滅」を「拡大」化し、そして「相対的な人間関係によって成りたつ世間の仕組み」に「世の中の本来の下等さ」を見た芥川は、『芋粥』において、それを「無位の侍とともに」「呪詛している」とされるのである。『芋粥』の主題については、「人間のエゴイズムの究極としての存在悪」を「かかえこんだ人間たちのからみあう世の中の本来の下等さ」を、勝ち犬の恣意によって、生のあかしを奪われる負け犬の悲劇に托して描いている」と規定されている。これは、和田繁二郎氏の、「貴族たちの中にひそむ人間の兇悪」を代表する利仁と「いためつけられている民衆の象徴」である五位との対立関係に着目された観点を批判的に継承された注目すべき論考であるが、これを重要な手掛として、ここで、利仁の人物的特性を確めてみたい。

利仁が五位との関係を持ちながら登場する最初の場面は、次のとおりである。《彼は飲んでしまった後の碗を上げしげと眺めながら、うすい口髭についてゐる滴を、掌で拭いて誰に云ふともなく、「何時になつたら、これに飽ける事かのう」と、かう云つた。『大夫殿は、芋粥に飽けた事がないさうな。』／五位の語が完らない中に誰かが、嘲笑つた。錯のある、鷹揚な武人らしい声である。五位は、猫背の首を挙げて、臆病らしく、その人の方を見た。》（傍点引用者）利仁の人物像は、この場面の利仁の嘲笑をどう解釈するかによって、大きく分れていくものと考えられる。そこで、まず注意しなければならないのは、嘲笑直前の「大夫殿は、芋粥に飽けた事がないさうな。」という発言内容である。これは、意外に複雑な波及効果を持ったものといわなければならない。それは芋粥なるものが余りにも高級佳味な料理であり、侮蔑の共鳴を喚び起こさないからである。芥川は芋粥について、「芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘藷の汁で煮た、粥の事を云ふのである。当時はこれが、無上の佳味として、上は万乗の君の食膳にさへ、上せられた。従つて、吾五位の如き人間の口へは、年に一度、臨時の客の折にしか、はいらない。その時でさへ、飲めるのは僅に喉を沾すに足る程の少量である。」と、作中で説明している。

現代の生活感覚に包まれた社交の場で、誰かが「あの人は、青ダイヤのワイン

カップを使った事がないさうな」と発言したからといって、それが嘲弄の笑いに短絡することは決してあり得ない。気取りとは無縁な、澄渾として明るい淡白なスポーツマンが発言者であった場合、彼の張りのある鷹揚な声に包まれた発言内容は、明るい冗談となつて、健康な笑いを即座に喚び起すはずである。

「錯のある、鷹揚な、武人らしい声」に包まれた利仁の発言内容が、五位の嘲弄を待ち構える宴会の座に笑いを喚び起さないのは、彼の発言の背後に、満座の誰もが持ち合わせないような大きな生活力のあることを感知し、畏怖にも近い念に襲われたからではなからうか。この時点における沈黙者は、総て、五位と并列に位置する「負け犬」といえる。もっとも、「酒を飲む事」と「笑ふ事」の二つしか「生活の方法」を心得ていない「朔北の野人」利仁は、もともと、五位に集団的な嘲笑を浴びせようとする煽動的魂胆から発言したのではなく、原話の舅と同じ生活実感から、率直に、「安き物にも飽せ不給ける哉」という思いをこめて嘲笑したのであり、それは、宴座の共感を喚ばない孤独な嘲笑といえよう。この嘲笑後の「お気の毒ぢやの」という「軽蔑と憐憫とを一つにしたやうな声」も、宴座の共感を誘う煽動的な言辞ではなく、直前の嘲笑と同じく、生活実感を踏まえながら口にした、率直な感想と解すべきであろう。宴座に笑いが生じないのは当然であり、朔北の野人・利仁の「お望なら、利仁がお飽かせ申さう」という申し出は、京侍の胸中に、自負毀損の危惧と反発を喚び起していたのではなからうか。

五位の躊躇後、「いや……忝うござる」と返答をした時、満座が「一時に、失笑した」のは、その返答に、五位固有の生活のみすばらしさが結晶し、京侍の胸中から、自負毀損の危惧が消失したからであり、次の場面における利仁の笑いと彼以外の人々の笑いの間には、大きな相違があるものと考えられる。

《「いや、忝うござる。」——かう云つて、五位の答を、真似るものさへある。所謂、橙黄橘紅を盛つた窪杯や高杯の上に多くの揉鳥帽子が、笑声と共にしきり、波のやうに動いた。中でも、最、大きな声で、機嫌よく、笑つたのは、利仁自身である。『では、その中に、御誘ひ申さう。』さう云ひながら、彼は、ちよいと顔をしかめた。こみ上げて来る笑と今飲んだ酒とが、喉で一つになつたからである。『……しかと、よろしいな。』／「忝うござる。」／五位は赤くなつ

て、吃りながら、又、前の答を繰返した。一同が今度も、笑つたのは、云ふまでもない。それが云はせたまに、わざわざ念を押した。利仁に至つては、前よりも一層可笑しさに広い肩をゆすつて、哄笑した。この朔北の野人は、生活の方法を二つしか心得てゐない。一つは酒を飲む事で、他の一つは笑ふ事である。しかし幸に談話の中心は、程なく、この二人を離れてまつた。これは事によると、外の連中が、たとひ嘲弄にしろ、一同の注意をこの赤鼻の五位に集中させるのが、不快だつたからかもしれない。》(傍点引用者)

「五位の答を、真似る者」の気持とそれに同調する「笑声」は、生活のみずばらしさの結晶する五位の挨拶そのものに向けられた侮蔑の笑いである。これに対し、利仁の笑いは、異質の要素を持っていてと考えられる。

「機嫌よく」という修飾語は、五位のみずばらしい挨拶に対する侮蔑の感情を表わす語と解するよりも、高級佳味な芋粥を五位に振舞おうとする率直な好意が受け入れられたことによる満足や、無意識のうちに働く自己顕示欲を充足させ得た喜びの感情を表わす語と解する方が、文脈上、自然ではなからうか。これは、五位が、最初、利仁の芋粥馳走の申し出に躊躇していた時、「少し面倒さうな声」で「おいやうなら、たつてとは申すまい」と言いきる不満の語調と裏表をなすものであり、この不満な語調を持つ「面倒さうな声」には、朔北の野人の率直な不満とともに、財力、武力を蓄積しながら、強大な生活基盤を広げている地方豪族としての自己顕示欲が、無意識のうちに働いていることはいうまでもない。

利仁が、前と同じ「忝うござる」という返事を言わせたために、「わざわざ念を押した」のは、同席の人々に侮蔑の笑いを再度誘おうとするのではなく、己れの好意が受け入れられ、自己顕示欲を満たすことのできる喜びの確認であり、利仁の心が五位を嘲笑する同席の人々と繋つていゝとは考えられない。利仁が、同席の人々と繋りながら、彼等と同じ嘲笑を五位に発していたとするならば、「談話の中心」が利仁と五位との「二人」から「離れてしま」うことはなく、どこまでも、五位のみから離れ、利仁は五位以外の人々の談話の中に入っていないければならなかつたはずである。

このように、利仁が五位との関係を持ちながら登場する最初の場面の「笑い」に留意してみる時、利仁は、五位を嘲弄する京侍や京童と同一世界の人間ではな

く、むしろ、五位と人間的な関係結び得る無位の若侍と世界を同じくする人間といえよう。「羅生門」の「darkness」の中を経てきた芥川は、勿論、エゴイズムのない愛のロマンなどを追い求めることはできないのであり、朔北の野人・利仁は、自ら、率直な同情とともに、無意識の自己顕示欲を持つことになるが、しかし、無位の若侍を佛とした「朔北の野人」利仁の人間的特徴には、「貴族たちの中にひそむ人間の兇悪」性の象徴を見ることは難しく、また、「自分の力を誇示する勝ち犬」の姿を求めることにも、些か留保を覚えるのである。ここで、敦賀への道行き場面における利仁と五位との人間関係の特徴に注目してみたい。

三 利仁と五位の和合とその破綻

敦賀への道行き場面は、「周囲の軽蔑の中に、犬のやうな生活が続けて行かなければならなかつた」五位と、地方には強大な生活基盤を持ちながら、都では、無位の侍として摂政家の警護役を勤める「両棲類」利仁が、日常的生活次元の利害得失を離れ、両者それぞれの抱く大きな夢の実現に向つて前進する蜜月の旅といえるのではなからうか。五位の夢が「芋粥に飽かむ」ことであることはいうまでもない。これに対し、利仁の夢は、「酒を飲む事」と「笑ふ事」という二つしかない都での「生活の方法」を越え、己の堅牢な生活基盤に支えられた強大な権勢を思う存分に発揮しながら、芋粥馳走の好意的計らいを華やかに遣り遂げることである。

ところで、この道行き場面における利仁には、五位に対し常に強者として振舞うことは不可能であつたと考えられる。勝倉寿一氏は、利仁と五位との対立関係に着目された三好行雄氏の論の延長線上に立たれながら、「利仁の心理と行為の中に、勝ち犬の気ままや傲りを見ることは正しい。そして、優越者の気まぐれに弄ばれた五位は哀れであり、確かに「悲劇」的であるのだが、利仁の加害の大きさとその人間性の下等さは、むしろ利仁が恣意や倨傲の害に自ら気づくことなく、しかも、五位との人間的な格差を確認して満足を得ようとする浅薄な虚栄心に発する悪戯が、憐憫と好意の下に許容されると自認している点にある」とされ、そして、芥川は、「(「悲劇」に昇華し得ないやりきれなさの中に、近代の人間関係のどうにもならない惨めさ・下等さを見ているのである)」という鋭利な見解を

提示されているが、この道行き場面において、強者として振舞いとおすことのできない利仁の心理に着目してみる時、さらに、別様の人間関係が見えてくるのである。

利仁が五位に目的地を問い質されて応答する最初の場面での問題は、利仁が、何故「東山の近くに」とか「お案じになる程遠くはない」と偽って、五位を敦賀まで誘わねばならなかったかということである。これは、「勝ち犬の気ままや傲り」による悪戯と片付けるわけにはいかない。それよりも、京人の五位が、京を遠く離れた未開の辺地に向って、果して同道を承諾してくれるだろうかという懸念から生じた作為と見るべきであろう。

三井寺での休憩後に、目的地の敦賀であることを知らされた五位は、「幾多の山河を隔ててゐる」越前の国の遠さと「往來の旅人が、盜賊の為に殺されたと云ふ噂さへ」ある僻遠の地の恐ろしさを思いながら、「敦賀と申すと、あの越前の敦賀でござるかな。あの越前の」「滅相な」(傍点引用者)という極度の狼狽振りを見せているが、京を出立する時点の利仁には、この五位の狼狽振りがすでに予見できていたのであり、それ故にこそ目的地の敦賀であることを打ち明けず、虚言を重ねていたのではなからうか。当然、虚言を重ねる利仁の言葉には、それなりの心の陰翳が表われているものと考えられる。ここで目的地の敦賀であることを明かす時点までの利仁の応答に注目してみたい。

第一の応答は、出発後間もない頃の「どこでござるかな」という五位の質問に答えたものである。「すぐ、そこぢや。お案じになる程遠くはない」(傍点引用者)という言葉には、相手を庄する重い語調が感じられる。これは、「身長の群を抜いて」で「遅しい」、そして、「鬚黒く鬢ぐきよき」武人・利仁と、「背が低く」「赤鼻でしかも穴のあたりが、澳にぬれ」「身のまはり万端のみすばらしい」侍・五位との人間的な格差が、そのままに表われた語調である。率直な同情に、地方豪族としての抑えがたい自己顕示欲が自ずと混在し、相手を威圧する大きな力になっていると見てよからう。「ぢや」「ない」という文末語には、敬語法も用いられていない。

第二の応答は、最初の質問時に、五位が当て推量に名を挙げた粟田口を通り過ぎる時のものである。「粟田口ではござらぬのう」と訝る五位に「いかに、も

そつと、あなたでな」(傍点引用者)と答える利仁の言葉には、第一の応答時の言葉には見られないもの柔らかな語調が感じられる。文末の「でな」には「ぢや」とは異なり、自己顕示欲の混入する威圧感はなく、むしろ、相手と同列に並んだ心情が動いている。しかし、「微笑を含みながら、わざと、五位の顔を見ないやうにして、静に馬を歩ませてゐる」(傍点引用者)という描写部の「微笑を含みながら、わざと」という言葉に注意してみると、白々しい虚言を重ねることへの後ろめたさを表わす心情とも異なる微妙な陰翳にぶつかる。これは、利仁が五位との人間的格差に安心しているために生じる制しがい倨傲の影と見ることができると、また、その安心に支えられて後ろめたさを韜晦する、悪戯っぽい照れ隠しと見ることもできよう。

第三の応答は、第二の応答中の「もそつと、あなた」の具体的地名を問い質されて答えたものである。「山科は、これぢや。もそつと、さきでござるよ」(傍点引用者)という表現が、第二の応答のもの柔らかな語調を持った「もそつと、あなたでな」(傍点引用者)という表現に比べて、押しの強い語になっていることである。もっとも、「そこぢや」という第一の応答表現に比べれば、「ござる」という敬語法と「よ」という語りかけの親密度が加わる柔和な響きの終助詞によって、威圧的な語調は弱められているといえるが、すぐ上の「山科は、これぢや」(傍点引用者)という押しの強い響きを持った断定詞の力の交錯を考えると、押しの強さはやはり否定できないのであり、この応答は、威圧と心遣いと混在する微妙な陰翳を担っているものといえよう。その中には、第三の応答と同様に、自分と五位との間の人間的格差に安心しているために生じる倨傲の影とか、また、その安心に支えられて後ろめたさを韜晦する空威張りの影などを認めることもできよう。

第四の応答は、三井寺を過ぎ、「今まで来た路に比べると遙に人煙が少ない」「行手」を前に、心細げに目的地を質す五位の問いに答えたものである。

《「まだ、さきでござるのう。」／利仁は微笑した。悪戯をして、それを見つけれさうになつた子供が、年長者に向つてするような微笑である。鼻の先へよせた皺と、眼尻にたたへた筋肉のたるみとが、笑つてしまはうか、しまふまいかとためらつてゐるらしい。さうして、とうとう、かう云つた。／「実はな、

敦賀まで、お連れ申さうと思つたのぢや。」／笑ひながら、利仁は鞭を挙げて遠くの空を指した。》(傍点引用者)

「悪戯」とは、「無益でわるいたわむれ」の意であり、また、「戯れる」とは、「(1)遊び興ずる。おかしい言動をする。おどける。(2)まじめでないことをする。いたずらをする。(3)遊戯をする。」という意味である。この辞書的意味からすると、子供の悪戯は、本来、気軽に楽しみ興ずる無益で悪い不真面目な行為ということになる。悪戯をして、それを見つけられそうになつた子供は、突如、罪の意識を呼び覚ましはするが、根本に働く意識が楽しみ興ずる遊び心であるだけに、大人の寛容な心に凭り掛りながら、罪の意識を、甘えと照れの混在する笑いの中に解消しようとすると考えてよからう。虚言に乗せられつづけたまま、貞顔で「まだ、さきでござるのう」と目的地を問ひ質す五位を前に、このような甘えと照れの混在する微笑を浮かべる利仁の複雑な表情の動きの中には、「勝ち犬」としての倨傲の威圧を読みとることはできない。ところが、やがて抑制が失われ、「実はな、敦賀まで、お連れ申さうと思つたのぢや」と「笑ひながら」真相を明かす時点の利仁の笑いには、罪の意識を笑いの中に解消していこうとする甘えと照れよりも、自分と五位との人間的格差に支えられた安心感とそのため生じる倨傲の影が動きはじめるのである。この安心感が大きな威圧力を備え、五位を圧しはじめるのは、五位が真相を知って狼狽する直後の言葉からである。

《「利仁が一人居るのは、千人とも思ひなされ。路次の心配は、御無用ぢや。」／五位の狼狽するのを見ると、利仁は、少し眉を顰めながら、嘲笑つた。さうして調度掛を呼寄せて、持たせて来た壺胡録を背に負ふと、やはり、その手から、黒漆の真弓をうけ取つて、それを鞍上に横へながら、先に立つて、馬を進めた。かうなる以上、意気地のない五位は、利仁の意志に盲従するより外に仕方がない。それで、彼は心細さうに、荒涼とした周囲の原野を眺めながら、うる覚えの観音経を口の中に念じ念じ、例の赤鼻を鞍の前輪にすりつけるやうにして、覚束ない馬の歩みを不変ととばと進めていつた。》(傍点引用者)

「思ひなされ」という命令形の後、「心配は、御無用」という誇らかな自信を表わし、しかも、「ぢや」という押しの強い響きを持った重い断定詞で締め括る言葉には、自ずと、威圧的な語調が生まれている。第二、第三、第四に覗いてい

た、五位と同列に並んだ心情とか、威圧と心遣いの混在する微妙な陰翳とか、あるいは、甘えと照れの混濁した微笑などは一片の名残りも見せてはいない。利仁の「少し眉を顰めながら」浮べる五位への「嘲笑」は、「壺胡録を背に負」い、「黒漆の真弓」を「鞍上に横へながら」馬を進める武人・利仁と「うる覚えの観音経を口の中に念じ念じ」「赤鼻を鞍の前輪にすりつけるやうにして、覚束ない馬の歩み」を進める京侍・五位との間の戦闘的自信力の格差が生み出した優越的笑いといえるが、利仁がこの機になって、自信を誇示する威圧的な姿勢を取ることでできたその原因と、自己拡大の契機を持ち合わせない五位の閉塞的な生の根本原因とは密接に関わっているものと考えられる。

すでに見てきたように、この五位と利仁との同道の旅は、五位の「芋粥に飽かむ」夢と、利仁の、強大な権勢を思う存分に発揮しながら、芋粥馳走の好意的計らいを華やかに遣り遂げようとする夢とが見事に和合した蜜月の旅である。しかし、利仁の第二、第三、第四の応答に見られる微妙な陰翳の変化や目的を五位に明かす地点の状況や、あるいは、それ以降に見せる利仁の急激な態度の変化などに留意してみると、二人の和合は、拮抗するある力関係によって支えられたものと見なければならぬ。その成立要素を見定めるためには、二人の均衡する力関係が崩壊する地点の状況把握が重要な手掛りになるものと考えられる。その地点の状況描写は次の通りである。

《成程、さう云う中に、山科も通きた。それ所ではない。何かとする中に、関山も後にして、彼は、午少しすぎる時分には、とうとう三井寺の前へ来た。(略)利仁の懇意にしてゐる僧(略)を訪ねて、午餐の馳走になつた。それがすむと、又、馬に乗つて、途を急ぐ。行手は今まで来た路に比べると、遙に人煙が少な。殊に、当時は盗賊が四方に横行した、物騒な時代である。》(傍点引用者)

「も」「それどころではない」「とうとう」という語句は、都から遠のく距離感を表わし、そして、「今まで来た路に比べると遙に人煙が少ない」「行手」の状況描写と「物騒な時代」の説明は、非力な京侍・五位を不安に陥れる僻地性を示している。五位は、この距離感と僻地性によって、利仁の好意を辞退する自由を失つたのである。つまり、五位は、この僻遠の物騒な土地まで来て、目的地が遠いからといって今更一人で帰ることもできず、利仁の意のままに従わざるを得なくな

ったのである。この目的地を表明した地点の情景描写と、次の出発当初の情景描写とを比較してみる時、利仁と五位との間に働く力関係の様相は一層明瞭になってくる。

《冬とは云ひながら、物静に晴れた日で、白けた河原の石の間、潺湲たる水の辺に立枯れてゐる蓬の葉を、ゆるする程の風もない。川に臨んだ背の低い柳は、葉のない枝に飴の如く滑かな日和の光りをうけて、梢にゐる鶺鴒の尾を動かすのさへ、鮮かに、それと、影を街道に落してゐる。東山の暗い緑の上に、霜に焦げた天鵞絨のやうな肩を、丸々と出してゐるのは、大方、比叡の山であらう。二人はその中に鞍の螺鈿を、まばゆく目にきらめかせながら鞭をも加へず悠々と粟田口を指して行くのである。》(傍点引用者)

二人の姿には、それぞれの夢の実現に向つて前進する充実感と対等に並び添う親和感を感じ取ることができる。風景描写にも、この二人の心情は連鎖しており、この描写は平岡敏夫氏の指摘のとおり、「とげとげした加害・被害の悲劇などとは無縁」のものである。この時点の五位には、利仁の好意を辞退し、利仁との同道を拒否する自由があるのであり、利仁は、この五位の自由とその中に働く京侍としての文化的優越意識を心に留め、それに、好意的な、計らいを華やかに遣り遂げながら自己顕示欲をも満たす芋粥馳走の夢を対峙させ、そして、その拮抗する力関係のもとで、和合していったといえるのではなからうか。

京から遠く離れ、盗賊も跋扈する物騒な地点に到達し、そして、この拮抗する力関係が崩壊した時、利仁は自ずと、己れの夢の実現のみを考える自由を獲得し得たのである。五位の悲劇の要因は、このように、利仁と拮抗する力関係を喪失しなければならなかったところにある、その根本原因は、京とか僻遠の地という位置的条件を越えて、利仁と十分に対峙し得る五位固有の主體的な生が発揮できなかったところにあるという外はない。「孤さへ願使」し、これを使者に仕立てた利仁の「野育ちの武人の顔を、今更のやうに、仰」ぎ見ながら、「利仁の意志に、支配される範囲が広いだけに、その意志も、それだけ自由が利くやうになつた事を、心強く感じ」る五位に、五位固有の主體的な生を発揮し得る余地など残されているはずがないのである。

むすび

杉山康彦氏は、人間主体の問題を、鶏の世話をして卵を入手する母子の労働と意識との関係を例として、「あの心のときめきとはこの自然対象の所有的自化のよろこびでもある。(略)彼らはその時自己の労働の目的を達し、労働の結果をそこに見、労働する前の彼らは拡大された自己としてそこにいる」と論じておられる。

『芋粥』の主人公・五位にとって、卵を入手した母子のような心のときめきは無縁のものである。「犬のやうな生活」者として規定された五位は、他者との関係の中で自己拡大を図る道は閉ざされているのであり、また、「同じやうな役目を、飽きずに、毎日、繰返してゐる事だけは、確である」五位の姿から、仕事自体の中に、自己拡大の道が見出されているとは考えられない。対人関係においても、また、仕事自体の中にも、自己拡大の契機を塞がれた五位が、自己の閉鎖的な世界の中で、「芋粥に飽かむ」という夢を増殖させ、その夢想的な觀念に生きがい求めたのは、一つの代償行為として、至極当然の成り行きであつたといえよう。それだけに、日常的な生活次元において自己拡大の道を塞がれた五位が、己れの自閉的世界の巨大な觀念を現実化していくためには、日常次元からの離脱は必須の条件であつたと見なければならぬ。湖北の野人・利仁の堅牢な生活基盤に根を下ろした率直な同情と抑えがたい自己顕示欲が重なり合つて誕生した芋粥飽食への「旅」は、五位の自閉的世界の巨大な觀念を、現実次元のものとして構築し、京での「犬のやうな生活」から大きく飛翔する契機を掴む重要な場であつたはずである。ところが、湖北の野人・利仁と京侍・五位との拮抗する力関係が崩壊し、そして、利仁が自己顕示欲の衝動へと傾斜していった時、五位の再生の契機は自ずと消滅していったのである。

利仁の「酒を飲む事」と「笑ふ事」の二つの生活方法しか心得ていない野人的心が、無位の若侍を佛とした救済者となるためには、やはり、京とか僻遠の地という位置の条件を越えて、利仁の生と十分に拮抗し得る五位固有の主體的な生の確立が必要であつたのであり、再生の機を喪失する五位の悲劇には、実生活において、意に副わない自己抑制に生きながら、過剰な自意識に責め立てられなければならない芥川自身の生の哀感が、自虐的に描き込まれているといえるので

はなからうか。

三つの愛の原体験を『鼻』の主人公、禅智内供の三つの心理に託し、「最も賢い処世術は社会的因襲を軽蔑しながら、しかも社会的因襲と矛盾せぬ生活することである」(侏儒の言葉)という思いを苦々しく嘯みしめなければならなかった芥川は、やがて、文学仲間とか文壇の『鼻』批評に対する反発・不安をモチーフとした『野呂松人形』の中では、先駆者アナトール・フランスの言を拠り所に、個人の主情的判断や文壇の派閥の力学によって動く作品評をすべて相対化し、「新思潮」とか「漱石山房」における意外に生々しい人間関係を摺り抜けていったのであるが、このようにして、自己の脆弱な資質を厳しく凝視しつつ芥川にとって、『偷盗』は『羅生門』をとりまく「darkness」の中に、「something」を見出す場であると同時に、堅牢な自立的生を確立するための重要な場でもあったといわなければならない。

ところが、『偷盗』の芥川は、『イワン・イリッチの死』のゲラーシムとワシヤの無垢な魂を拠り所に、『羅生門』の闇を克服していく一条の光を探り当てながらも、イワン・イリッチの、孤独な苦悩の底で呻吟する強靱な自我の確執とか神の恩寵に与る法悦の高みを前にして、新たな異質の文化の問題に直面しなければならなかったものであり、この異質の文化を下町的精神土壌の中に活着させようとする時、芥川は、『偷盗』世界の基底に根を張る日本の家族我的文化的特質の解明に合わせ、日本的家族我の中に解体していく己れの脆弱な生の原質の確認を迫られたといえるのではなからうか。『芋粥』はこの脆弱な生の原質を再確認するための作品であり、また、トルストイの受容過程において直面しなければならなかった東西文化の異質性の問題は、やがて、『手巾』や『煙草と悪魔』の重要なモチーフになっていったものと考えられる。

〈注〉

- (1) 〈「偷盗」への一視覚〉(『語文研究』31・32合併号、一九七一、一〇—
日本文学研究資料叢書「芥川龍之介Ⅱ」所収、一九七七、九、有精堂、一二四頁)
(2) (1)に同じ。
(3) 拙稿〈「羅生門」小考—形象イメージを手掛りに—〉(一九八二、三、岡大

国文論稿一三五頁—一三六頁)において触れる。

(4) ワーシヤを日本の精神風土の中に生かそうとする時、『戯作三昧』の馬琴の孫、太郎に委容したといえるのではなからうか。

(5) 南博氏は「日本人の場合、集団我は最も典型的なたちで、家族集団のなかで深い心理関係に結ばれる成員たちが共通に分けもつ、家族我を生み出す」と論じておられる。(『日本の自我』一九八三、九、岩波書店、二六頁)

(6) 三好行雄氏の「負け犬」「芋粥」の構造——(『芥川龍之介論』一九七六、九、筑摩書房、八〇頁)にすでに、この指摘が見られる。

(7) (6)の論文八八頁。

(8) 〈芥川龍之介〉(一九五六、三、創元社、五二頁)

(9) 長野菅一著「古典と近代作家—芥川龍之介」(一九七二、三、有明堂、七八頁)

(10) 〈芥川龍之介の歴史小説〉(一九八三、六、教育出版センター、八四頁)なお、菊地弘氏は、利仁に、「怖気づいた五位とはまるで違ふ素朴で鷹揚な生活の様式と気質」を読みとられながら、三好行雄氏の見解を発展的に捉えなおされている。(『芥川龍之介—意識と方法—』一九八二、一〇、明治書院)

(11) 新村出編「広辞苑」(一九七八、九、岩波書店)

(12) 〈芥川龍之介—抒情の美学—〉(一九八二、一一、大修館書店、一六三頁)

(13) 〈芸術と疎外〉(一九六四、三、紀伊国屋書店、一三頁)

(14) 拙稿「『孤独地獄』小考—漱石の影響—」(岡大國文論稿、一九八三、三、七二頁—七三頁)

(15) 拙稿「『野呂松人形』小考」(岡大國文論稿、一九八四、三、五六頁—五八頁)

〈付記〉『イワン・イリッチの死』の引用文は、米川正夫訳(一九七七、二、岩波書店)

昭和五十九年三月十五日受理